

ストップ・ザ・バイオハザード

国立感染研の安全性を考える会ニュース

<発行>ストップ・ザ・バイオハザード
国立感染症研究所の安全性を考える会
〒162-0052
東京都新宿区戸山1-18-6
電話&ファクス 03-3209-9666

郵便振替 00180-1-408810

Eメール sgxwp921@ybb.ne.jp
HP http://stopbiohazard.com/

第20回平和のためのコンサート

語りと音楽による『あの星は僕』被爆二世の死



▲『あの星はぼく』を心を込めて歌うアンサンブル・ローゼの皆さん



▲『あの星はぼく』名越操さんの詩を朗読する河原田ヤスケさん



▲『白鳥』『鳥の歌』などチェロ独奏する佐藤智孝さん(写真右)

第20回平和のためのコンサートが、6月8日午後、東京・新宿区の牛込筆筒区民ホールで開かれました。前日に関東が梅雨入りして空模様心配がりましたが雨もやみ、コンサートが開かれるようになってから20回目の節目となった今年も、開場と同時に大勢の来場者があり、400ほどの席がほどなく埋まりました。

長岡幸子さんの司会で幕が開きました。このコンサートは、平和のためのコンサート実行委員会が主催し、アンサンブル・ローゼ、ノーマ・ヒロシマ・コンサート、ストップ・ザ・バイオハザード国立感染症研究所の安全性を考える会、パイオハザード予防市民センターが後援しています。

第一部では、「語り」と音楽による『あの星はぼく』被爆二世の死』と題し、河

原田ヤスケさんの語り(詩・名越操)と、アンサンブル・ローゼの池田孝子・斎藤みどり・高橋順子・渡辺裕子・芝田貞子・嶋田美佐子・高崎邦子・水谷敦子のみなさんによる歌(作曲・木下航二、編曲・越塚賢二)の構成で上演されました。ピアノは末廣和史さん。

この語りと音楽の構成による上演は、今回初めて行われることが紹介されました。史樹は原爆が落ちた広島に生まれ、白鳥は、パンの祖国ポーランドへの思いを込めた曲として紹介。(高橋友也・世話)

第20回 平和のためのコンサート

第二部



ヴァイオリン独奏する信田恭子さん

第二部の最初は、信田恭子さんのヴァイオリン独奏に末廣和史さんピアノが加わり演奏。演奏の作品は、「ハバナ形式の小品」「ラヴェル」「チャールダーシュ」(モンテ)。ハバナ形式とはハバナ風とい

う意味で、たゆたうようなリズムにイメージが広がります。チャールダーシュは、「酒場風」という意味のハンガリー音楽のジャンルの一つだとか。イタリア人の作曲によりますが、軽快さと高揚感を感じた演奏でした。

次に「ロシア民謡」と題し、ロシア文化に詳しく、ロシア文学者の伊東一郎さんから歌(「行商人」)



ロシア民謡を歌う伊東一郎さん

ロシア民謡は我が国では外国民謡のなかでも特に親しまれているジャンルだが、日本で「ロシア民謡」と一括りにされているものの中には実際には極めて多様なジャンルが含まれている。本来のロシア民謡は農村で農民によって歌われてきたものであり、日本でよく知られている「一週間」はそれに当たる。歌詞の不条理が目立つのは、「糸と麻を買ってきた」新妻がそれを一週間もほったらかして遊び惚けているうちに一週間が過ぎてしまった、という風刺的内容の故である。

ロシア民謡は我が国では外国民謡のなかでも特に親しまれているジャンルだが、日本で「ロシア民謡」と一括りにされているものの中には実際には極めて多様なジャンルが含まれている。本来のロシア民謡は農村で農民によって歌われてきたものであり、日本でよく知られている「一週間」はそれに当たる。歌詞の不条理が目立つのは、「糸と麻を買ってきた」新妻がそれを一週間もほったらかして遊び惚けているうちに一週間が過ぎてしまった、という風刺的内容の故である。

ロシア民謡と文化

ロシア民謡は我が国では外国民謡のなかでも特に親しまれているジャンルだが、日本で「ロシア民謡」と一括りにされているものの中には実際には極めて多様なジャンルが含まれている。本来のロシア民謡は農村で農民によって歌われてきたものであり、日本でよく知られている「一週間」はそれに当たる。歌詞の不条理が目立つのは、「糸と麻を買ってきた」新妻がそれを一週間もほったらかして遊び惚けているうちに一週間が過ぎてしまった、という風刺的内容の故である。

は、出演者と会場のみならず、平和への願いを込めた「青い空」を合唱。命の重みをかみしめ、歌声に願いを込めたコンサートを締めくくりました。(高橋友也・世話人)

の詩が作曲者不明の旋律によって歌われたもので、厳密にはソヴィエト民謡と言うべきである。同じイサコフスキーが1988年に書いた詩にブランデルが作曲したのが「カチューシャ」で、この二つの歌はソ連では独ソ戦以降広く歌われるようになり、戦後の日本でもうたごえ運動の中でも愛唱歌となった。「百万本の薔薇」は多民族国家ソ連を象徴するような歌である。この歌は最初ラトヴィアの作曲家パウラスがラトヴィア語の歌詞に作曲した歌だったが、この曲にロシアの詩人ヴォズネセンスキーが全く違う歌詞をつけたのが「百万本の薔薇」だった。しかも詩の舞台はグルジアであり、放浪画家ピロスマニが旅まわりの女優に恋をして、百万本の薔薇を贈った、という伝説を歌っている。このような広がり多様性もまたロシアの歌の魅力なのかもしれない。(伊東一郎)

長崎大の施設はP4



写真1:長崎大学医学部正面横に「BSL4施設 NO!」の横断幕を掲示

命感が怖い。もう一つは、この施設の運営方法と安全



在りし日の本庄重勇さん

本庄重勇先生ご逝去
代表の本庄重勇さんが二〇一九年七月一六日逝去

本庄先生は、予研裁判以来今日まで当会の運動にご尽力下さいました。

市民の力を得て「稼働差し止め」の本裁判へ
(前ページより)
この危機を乗り越えて、長崎大学は何とか二〇一八年九月に基本構想をまとめるに至る。こうして住民の手の届かない所で既成事実は進んでいった。もはやこの計画を止めるには裁判に訴えるしかない

い、となるのは必然で、二〇一八年一〇月、「BSL4施設計画の差し止めを求める会」が結成された。第一弾として同年十一月に「BSL4施設の情報開示等請求」の裁判を起こした。これは今後の差し止めを求める本裁判の資料集めという意味が大きい。

管理の研究をすること。おいおい、まだそんなのも確立していないのか!と驚くほかはないが、長崎大学の施設はP4施設運営法のいわば実験台である。

実はこの裁判は七月一六日に結審し、一〇月に判決を迎える。しかし、結果いかんにかかわらず、本裁判は差し止め本訴の材料集めと考えており、ほぼ目的は達している。

差止め仮処分申立てを行ったのだ。原告は個人二名のみで、弁護士の代理人は無しである(助言は戴ける)。これまでに四回の審尋が開かれ、第五回は八月一九日に開かれる。第二回までは裁判官は一名だったが、第三回審尋からは裁判官が三名体制となった。この対応には多少とも期待を寄せたかったが、或る人の「最近の裁判官はひでえからなあ」とのつぶやきで我に返った。大学側の反論のひどさも紹介し

明な判断はこの後の変化と大きく違い、何とも不可解であった。それもそのはず、この時の文部科学事務次官は、あの前川喜平さん!後で分かって、大いに納得したことだった。その後、前川氏はあらぬパッシングを受けて失脚させられるのだが、それに反比例するように水面下で設置推進側が巻き返し、十一月一四日、突如菅官房長官が知事と市長を官邸に呼びつけ、設置容認を迫ったのだ。その時点から一気に事態が進展し、現在に至るわけだが、八月の概算要求却下から十一月の復活までわずか二か月余。この間は獣医学部の新設条件を巡って文部科学省が官邸に身体を張って抵抗していた時であり、官邸は是非でも前川氏を排除したかった状況にあった。長崎大学のP4施設も加計学園獣医学部も安倍案件、国家戦略施設となる運命にあると住民は覚悟しなければならぬ。逆に長崎大学は死んでも計画撤回はできない。(次ページへつづく)

運営の実験台に

住宅密集地に危険なBSL4はいりません



写真2: P4施設建設場所の横に「住宅密集地に危険なBSL4はいりません」の看板 (浦上天主堂を臨む)

写真1の横断幕、どこに掲げられているかお分かりだろうか。実は長崎大学医学部の正門のすぐ横なのである。この十数坪は私有地であるが、長崎大学としては迷惑千万な話。本当は市の景条例に違反するらしいが、表現の自由の問題だとして住民側は粘っているのである。問題のP4施設はこの横断幕の左手、キャンパス内の奥の方に建設される予定である。建設地からは双頭の浦上天主堂がすぐ目の前に見える(写真2は建設場所から浦上天主堂を臨む)。その周辺は住宅密集地で、多くの観光客が訪れる場所でもある。このような場所に我が国初のエボラウイルスの動物実験施設・遺伝子組換え施設が建設されようとしている。

施設はすでに二〇一九年一月二六日に着工され、工事が進行中である。二〇一四年ころから周辺住民は組織的な反対運動を行ってきたが、ついにここまで来たかという無力感はない。だがあきらめては終わらぬ。長崎大学も当初は施設の稼働を二〇年の東京オリンピックに間に合わせたかったのだが、今では「二二年の稼働を目指す」に変更。運動の成果で遅れたと皆信じている。

長崎大学にも危機があった。最大のものは二〇一六年の夏。情報公開請求で得た安全点検記録簿に大量のコピーがあるのを発見した。筆者らは記者会見で、こんな体質の組織では危険なP4施設の運営者となる資格はないと市民に訴えた。さらに、同じ六月に文部科学省は長崎大学の来年度のBSL4施設関連の概算要求を却下したのだった。理由は、「住民らの理解を十分に得られていない」だ。筆者らは快哉を叫び、これならイケル!皆がそう思った。

ところが、この後、とんでもない方向へ事態が進むのである。この時の文部科学省の賢